

アメリカ文化における障害の表象：H・P・ラヴクラフトと優生学

著者	西山 智則
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	17
ページ	23-36
発行年	2017-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001080/

アメリカ文化における障害の表象

— H・P・ラヴクラフトと優生学 —

Representations of Disability in American Culture

H.P. Lovecraft and Eugenics

西山智則

NISHIYAMA, Tomonori

I ネオ・ホロコースト・オリンピック・ 相模原障害者殺傷事件・適者生存

二〇二〇年に東京オリンピックを控え、「オリンピック・ファシズム」に陥る危険性に対して『反東京オリンピック宣言』（二〇一六年）が上梓された。その「あとがきにかえて」で小笠原博毅は、憲法改正と東京オリンピックを抱き合わせた安倍政権に対して「パンとサーカス」なる警句を再度投げかけた[二五二頁]。本来「パンとサーカス」とは権力者に「食料」と「見世物」を提供された群衆が、政治に関心をもたず、盲目的に服従することに対する古代ローマの詩人ユウェナリスの警告だ。この「サーカス」とは、映画版『ベン・ハー』（一九五九年）の競馬場の「^{サークル}周回」を繰り返す戦車レースが行われたり、剣闘士たちが死闘を展開した馬蹄形の「^{キクルス}競技場」を意味する。動物と死ぬまで闘うことすらあった「^{キクルス}競技場」では、生きるか死ぬかという競技の「スペクタクル」が展開していた（ユダヤ系フランス人作家ジョルジュ・ベレックの『^{ドッブルグエ}Wあるいは子供の頃の思い出』（一九七五年）では、スポーツの生存競争が掟となり死

ぬまで競技が遂行される「^{ドッブルグエ}W」なるディストピアが描かれる）。フランスのクーベルタン男爵を中心に、古代ギリシアの「オリンピックの大祭」という競技大会を復活させた一八九六年以降、「^{サーカス}見世物」としてのオリンピックは「スペクタクル」として機能してきた。「三・一一」後の東北の復興と連動すべきはずの東京オリンピックは国家という身体の（経済）成長を遂げられるのか。

鍛錬されたスポーツマンたちの肉体が踊るオリンピックだが、東京オリンピックの開催の準備として、都営霞ヶ丘アパートなどの撤去作業、都立明治公園のホームレスなどの排除が始まっている。たった数週間だけ開催されるオリンピックのために、賃貸住宅を終の棲家としている人たちが排除される。原口はこれを「浄化の暴力」と呼ぶ。「オリンピック・ゲームが注入された場所では、どこでも同じ物語が繰り返される。政策決定者は、まずたやすい標的、セックス・ワーカーとホームレスから始め、すぐ後にはエスニック・マイノリティや労働階級の住民をかねらの都市から追い出しにかかるのだ」[原口 一〇六頁]。競争による勝敗を決めるオリンピックによっ

キーワード：H・P・ラヴクラフト、優生学、クトゥルフ神話、アウトサイダー
Key words : h.p.lovecraft, eugenics, cthulthu myth, the outsider

て、社会的弱者はまたしても敗北するのだ。競争による社会の向上を掲げる「新自由主義」だった小泉内閣の構造改革は、効率化を説く新しい形のダーウィニズムであり、アベノミクスにも継承されている。こうした社会の歪みのひとつの鬼子が二〇一六年の「相模原障害者殺傷事件」だったのではないのか。

神奈川県立の知的障害者施設「津久井やまゆり園」に、二六歳の元職員植松が侵入し刃物で一九人を刺殺した。ヒトラーは自伝『わが闘争』（一九二五-六年）でユダヤ人を国家に寄生する「寄生虫」としたが、ユダヤ人大虐殺へと続くナチスの障害者や同性愛者の「T4安楽死計画」に賛同した植松が起こしたのが、この戦後最悪の無差別殺傷事件だった¹⁾。衆議院議長宛の植松の手紙は「安倍晋三様にご相談頂けることを切に願っております」と結ばれ、一方的に安倍総理の理解を得られると感じていたようである。「世界経済の活性化」「日本国と世界平和」という理想を掲げる植松は、「今こそ革命を行い、全人類のために必要不可欠である辛い決断をすべき時だと考えます」と、自分の行動を「革命」と考えていたことを見逃してはならない。この犯行は「個人の病理」ではなく「社会の病理」として再考すべきだ。上野千鶴子は『なぜ障害者たちが殺されたのか』以前に『なぜ彼らは施設にいなけりばならなかつたのか』という疑問を取りあげている [二三頁]。

障害者たちが入居する「津久井やまゆり園」で事件は起きたが、少人数のスタッフで「効率的」に障害者たちを「ケア」した施設が、皮肉にも「効率的」に短時間で大量の障害者たちを「抹殺」した「現代のホロコースト」を再現してしまったからである。ロバート・N・プロクターの『健康帝国ナチス』（一九九九

年）によれば、健康食品の開発、煙草や癩撲滅など、国家の健康に力を入れたナチス政権は、まず「ホロコースト」の前段階として、障害者や同性愛者などを抹殺し、そして、国家を蝕む「癌」や「寄生虫」としてユダヤ人を効率的に「浄化」していった。プロクターの原題『ナチスの癌との戦争』の通り、健康というイデオロギーが二重の意味の癌との戦争を行い、「民族浄化」へと向かったのだ。ドイツの思想家テオドル・アドルノは『プリズメン—文化批判と社会』（一九五五年）において、様々な解釈を生んだ「アウシュビッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という言葉を残した。ユダヤ人大虐殺^{ホロコースト}という現実の後、どうして芸術に向かえようか。こう解釈するのは容易いが、それほど単純ではない。不要な存在として障害者やユダヤ人を効率的に抹殺した「ホロコースト」は、効率を最優先にする資本主義から生じた究極の作品として、アウシュビッツという「(死の)生産の工場」を生んだ。ならば、今更その「文化」が生んだ詩などどうして書けようか。こうアドルノは問うたのかもしれない。

最小の労力で「効率的」に障害者をケアするはずの施設で、障害者たちを短時間で「効率的」に抹殺した「相模原障害者殺傷事件」は、優生学的発想のもと非生産者を排除する効率主義と障害者を「理解不能な者」とする他者嫌悪が生み落としたものである。事件前に植松は「大麻精神病」「自己愛性パーソナリティ障害」「妄想性障害」などの診断を受け、措置入院となっていた。ここで大事なのは、措置入院期間が不十分だったとする監視体制の強化を求めることではない。むしろ、精神障害者の認定を受けた植松が、社会の荷物になった自分自身の負の内部を、施設の障害者

という外部に投影して抹殺することで消し去ろうとした図式に注目したい。植松はヒトラーの政策に感銘を受けたが、ヒトラーにはユダヤ人の血が混じていたという説もあり、自己のユダヤの血を憎む余りユダヤ人を虐殺したヒトラーと、障害者を抹殺した植松の行動を上野千鶴子は重ねている[二七頁]²⁾。「相模原障害者殺傷事件」はいかなるゴシック文学も及ばない現実の恐怖として君臨してしまったが、一八八九年に生まれ、一九四五年に自殺したヒトラーと同時代を生き『わが闘争に』に感動し、優生学の時代に障害者の身体やエイリアンを描いた作家がいる。H・P・ラヴクラフト（一八九〇-一九三七年）、「クトゥルフ神話」の生みの親のアメリカ作家である。北欧系の出自を誇り、外国人を嫌悪したラヴクラフトもまた、植松と同様な精神構造をそなえ、「異形のスペクタクル」を見せつけた彼の文学はその反映ではなかったのか。

Ⅱ スポーツマンたちの世紀—退化・体操・競争

『種の起源』（一八五九年）『人間の由来』（一八七一年）が出版された後、ダーウィンの進化論は、アメリカでは社会進化論へと応用されてゆく。進化という競争から外れたものは淘汰される競争社会が激化し、障害者たちを断種し結婚を禁じることで不適者を排除して、適者による効率的の社会を目指す優生学が台頭する。イギリスの統計学者・人類学者でダーウィンの従兄弟のフランシス・ゴルトンが優生学という言葉を生み出したのは、一八八三年のことであった。その反面、社会評論家マックス・ノルダウの『退化論』（一八九二年）が世界的に反響を呼び、「白人種の退化」に怯えだしていた。ダーウィンの

進化論は、人間の内部に隠蔽された猿の問題を浮上させた。人間の顔から性格を推測する観相学から発達した骨相学が、『アメリカの頭蓋骨』（一八三九年）や『エジプトの頭蓋骨』（一八四四年）を書いたサミエル・ジョージ・モートンのように、人間の頭蓋骨の容量から人種の優劣を測定した「人間の測りまちがい」の時期に、観相学を応用し犯罪者の顔を類型化した犯罪人類学者チェーザレー・ロンブローゾは『犯罪者論』（一八七六年）を書いている。犯罪者とは動物的過去へと退化した人間であり、隆起した顎、斜視、歪んだ唇、毛深い肌、発達の不均衡などの特徴があると、犯罪者を猿のイメージで把握した。

人間という「皮」（英語のhideには「隠す」という動詞、「獣の皮」の名詞がある）の「下」に潜んだ動物的存在が追求されてゆく。たとえば、ロバート・ルイス・ステューヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』（一八八六年）では、善良な人生を送るジキル博士は薬によって内部に「隠蔽」されたハイドを目覚めさせる。変身すると体が縮みジキルの服が合わなくなるハイドは正常なジキルに対して退化する身体を表象する「危険な分身」となり、「青白い顔色の小人のような男」で「どこが悪いとも明言できないが、畸形の印象を与える」と描写されたり、とりわけ「猿」のような動物として描写されているのは見逃せない（Jekyllの名前はフランス語の「私（je）」と「殺す（kill）」を混ぜたもので、「自我」が「抹殺」されると「隠蔽」された獣が解放される。）古典ホラー映画と身体障害と優生学を考察するアンジェラ・スミスは、ルーベン・マムーリアン監督の『ジキル博士とハイド氏』（一九三一年）のジキルの変身シーンに退化と関連づけられた「てんかん発作」の意味を

見出しているが、この映画ではハイドに猿のイメージを積極的に使っている。世紀末の退化の恐怖が刻印されたこの作品だが、たとえば、性科学者ハベロック・エリスをはじめ多くの科学者は同性愛者を退化の諸相のひとつと考えていた。「クイア通り」という言葉も記されるこの物語を、「世紀末の同性愛のパンニックの寓話」として解釈したのは、『性のアナキー——世紀末のジェンダーと文化』（一九九〇年）の女性研究者エレイン・ショーウォーターだった。

男性の友人だけと交際するジキルはハイドと同性愛の関係があり、彼にゆずられていると弁護士アタソンは考えていた。ジキルの秘密は実験室の「戸棚」^{キャビネット}に隠蔽され、この「戸棚」^{キャビネット}には同性愛の告白を意味する「カムイングアウト (come out of the closet)」のイメージを読み込んでよい。二〇一四年にはハイドの視点から物語が語り直されるダニエル・ルヴィーンの『ハイド』が出版されており、母親に貞操帯をつけられ肛門に指を突っ込まれるという虐待を受け少年が解離性人格障害になった症例のことが説明され、同性愛と多重人格との関連を匂わせる。『ジキル博士とハイド氏』の映画・舞台化作品はどれもジキルと女性との関係を中心に捉えているが、まったく女性が描かれないジキルとハイドという「男同士の物語」からは、様々な「リメイク」が「誕生」した³⁾。ジキルの家政婦(ジュリア・ロバーツ)を主人公にしたステイーヴン・フリアーズ監督の『ジキル&ハイド』（一九九六年）では、原作で「意識の子宮の内部でこの双極の双子がたえず争っている」とされ、「誕生や死の瞬間をも凌ぐ恐怖」が続く「出産」のイメージでとらえられたジキルからハイドへの変身を、特殊メイキャップを使ってジキ

ルの身体からハイドが生まれ落ちるという男性による擬似出産を映像化してみせる。

退化に怯えたこの渦中において、退化を予防し、社会に「適」^{フィット}する「適者」になるために、様々な健康対策が考案されたのである。我々にも馴染みの「ジム」「フィットネス」「ボディビル」などの言葉の現代的意味を帯びてくる⁴⁾。たとえば、フランスではエドモン・デボネ教授が一八八五年のルールに「ジムナシウム」と呼ばれる身体鍛錬の教室を開講し、それは一八九九年にはパリ、そしてベルギーやスイスの各都市でも開講され、近代的「トレーニングジム」の起源でもある。デボネ教授はギリシア彫刻的なポーズを繰り返し、そのジムにはデボネを撮影した写真が壁一面に貼られ、実際に彼の身体から型どり製作された腕や足の石膏像が配置されていた。ギリシア彫刻を「モデル」として「模倣」したデボネは、今度は人々に理想を見せ、「模倣」させるモデルになる。一九一二年のロンドン第一回国際優生学博覧会では、デボネの弟子の女性遊泳者アネット・ケラーマンの写真が写真家アルベール・ロンドのクル病の家族の写真などと対比され、まっすぐ伸びたケラーマンの身体と曲がったクル病の身体が「危険な分身」のように「再生」^{リジェネレート}した身体と「退化」^{デジェネレート}した身体として「正常と異常、健康と虚弱、衛生と不潔...優生学にまつわる二項対立を強化してゆく」[増田 五〇頁]。

一八九六年の第一回近代オリンピックは古代ギリシアの「オリンピアの大祭」という競技大会の復活だったが、『身体文化』という当時の雑誌の一九〇五年一月号には、古代ギリシアの彫刻家アルカメネスによる『ボルゲーゼのアレス象』という彫刻と同じポーズを取るインストラクターの写真などが掲載されて

おり [増田 四一頁]、退化に怯える世紀末の理想の時代への回帰を求める欲望が透けて見える。富山太佳夫が『ダーウィンの世紀末』（一九九五年）で言うように、ボーイ・スカウト運動も、一八八〇年のボア戦争に志願した大英帝国の少年たちの身体の虚弱さを嘆き、自然でのスポーツを通じた訓練を通し、都市生活で退化した体を健康に回復させる帝国再建の「効率化」の一環として開始されたものだ [二五三-六五頁]。「ボディ・ビルディング」が「ネイション・ビルディング」と化して、筋肉男たちが跳梁したのが、この世紀転換期だったのである⁵⁾。全体主義化してゆく「身体のスペクタクル」は、ベルリン・オリンピックを記録したナチス政権下のドキュメンタリー映画『民族の祭典』（一九三六年）でその完成形を記録されることになる。

また、一八九九年に生まれたデボネと同じ年のユージン・サンドウは、ヨーロッパからアメリカにわたり、身体鍛錬の体操やボディビルを広めている。発明王エジソンは「キネト・スコープ」という映画の原型的装置で、ボディビルダーの元祖であるサンドウのギリシア彫刻的ポーズを『怪力男 (The Strong Man)』として一八九四年に撮影した。サンドウの「身体のスペクタクル化」はおおよそ一世紀後の一九九〇年代に、『S F 超人ヘラクレス』（一九六九年）でデビューし、『ターミネーター2』（一九九一年）などで銀幕に巨体を映しだした元ボディビルダーの映画俳優アーノルド・シュワルツェネッガーに継承される。そもそも、ユージン・サンドウ (Eugen Sandow) の「ユージン」の名前は、ギリシア語の「良い (eu)」血筋から「生まれること (genos)」から派生したが、奇しくも「優生学 (Eugenics)」という言葉と共振するこ

とになった。古代ギリシアやローマなどのセッティングは一九世紀のサーカスや大道芸の伝統となっていた。身体訓練のトレーナーであったジュール・レオタール（一八三八年-一八七〇年）は、サーカスの興行主にスカウトされ、彼の体操競技が空中ブランコの原型となる。身体訓練の先達としてデボネに尊敬されたが、世紀末を震撼させた梅毒で死亡したレオタールは、身体を古代風の衣装や小道具で飾り、その衣装から「レオタード」という言葉が誕生する [増田 四八頁]。

「自然淘汰」と「適者生存」によって競争主義を助長してゆく時代に異を唱えたのが、『不思議の国のアリス』（一八六五年）のルイス・キャロルである。「チャールズ・ドジソン」の本名を名乗るときに吃音のために「ド、ド」となまったキャロルは、「生存競争」の過程で進化から取り残され絶滅した飛べない鳥「ドドー」の自分を重ねたとされている。この『不思議の国のアリス』では、スポーツによる競争を風刺する場面が展開する。ウサギを追って穴に落ち、不思議な国で、巨大になったり、小さくなったりと、フリークスの存在に陥るアリスは、自分が成長しすぎる、成長しないのではないかという思春期の不安を体现するが、巨大化したアリスの涙による洪水が起こってしまう。そして、その洪水で濡れた動物たちは体を乾かすために、円形になって走り回るという「コーカス・レース」を展開する。ところが、そのレースでは円を回るために「誰も優勝することはない」、むしろ「みんな優勝、だからみんな賞をもらうべき」という反競争が提示されるのである。当時の最新機器のカメラで少女を撮影し、現在も日本のメイドカフェなどで模倣される「ロリータ少女の原型」アリスを創造した「元祖ロリコ

ン」ルイス・キャロルは、勝敗を重視のスポーツを風刺する「^{サークル}円環」の遊びを描き、「アンチ・スペクタクル」を示したのである。健全な身体・スポーツマンが躍動し、人種の退化と身体・精神の障害者の問題が浮上した大英帝国だが、同様の恐怖が支配した二〇世紀初頭のアメリカで活躍したのがラヴクラフトだった。北欧人種を崇拜したラヴクラフトはアメリカン・ゴシックをさらに「人種のゴシック」へと「異形のスペクタクル化」させたのだ。

Ⅲ 上空から来る恐怖—SF・移民・侵略

二〇一七年九月三日の地下で行われた北朝鮮の水爆実験、九月一日に北海道上空を通過した弾道ミサイル「火星一二号」、これらの脅威に揺れるとき、「クトゥルフ神話」のイメージを盛り込んだ『エイリアン』シリーズの最新作『エイリアン：コヴェナント』と並んで、黒沢清監督の『散歩する侵略者』（二〇一七年）が公開され、エイリアンに乗っ取られて帰ってきた夫が「侵略するよ。宇宙人ってそういうもんだろ」と侵略SFのジャンルを脱構築するような台詞を吐いていた。エイリアンに侵略された夫（松田龍平）と妻（長澤まさみ）の愛を描いたヒューマン・ドラマである。黒人奴隷制の下で黒人が白人になりすます「パッシング」がよく見られたアメリカで、人間になりすますエイリアンはSFの常套句だが、早くも一九三八年には、ジョン・W・キャンベルJrが「影が行く」を書いている。南極の探検隊が「^{いにしえのもの}旧支配者」の神殿を発見するラヴクラフトの「狂気の山脈にて」（一九三一年）からキャンベルは着想を得ていた。南極観測隊が氷河に凍結されたUFOを発見し、生き返ったエイリアンが人間にすりかわるこの短編は、ハワード・ホークス制作

の『遊星よりの物体X』（一九五一年）として映画化された。最後のセリフが印象的だ。「空を見ろ。空を警戒続けろ」。

ラヴクラフトが『ウィアード・テールズ』などに精力的に執筆を開始した一九二〇年代から三〇年代には、読み捨ての安い紙を使った「パルプ・マガジン」が流行し、大不況下で安価な娯楽を求めた大衆たちは現実逃避を求めて、SFやホラー小説が人気を集めた。「^{コスミック・ホラー}宇宙的恐怖」を描いたラヴクラフトの「クトゥルフ神話」は、人類よりも先に地球には旧支配者が存在しており、機会あるごとに復活を企んでいるという骨子である。ラヴクラフトの「大いなる遺産」は、一九四二年にフランシス・T・レイニーの『クトゥルー神話用語集』によって体系化され、オーガスト・ダーレスを筆頭に、ロバート・E・ハワードやリン・カーターなど「遺産相続人」たちによって現代の神話として編みあげ続けられている⁷⁾。たとえば、山小屋に宿泊した五人の男女が魔道書『ネクロノミコン』を読んできて、死霊と化して殺し合うサム・ライミ監督の『死霊のはらわた』（一九八一年）は、まぎれもない「クトゥルフ神話」の物語であり、さらにドリュー・ゴダード監督の『キャビン』（二〇一二年）では、山小屋に来た五人の男女が『死霊のはらわた』と同じ展開を迎えるが、山小屋は組織の施設でその様子が監視されており、彼らは太古の神々を目覚めさせないための生贄だったという予測不能なクトゥルフ神話的展開を見せた。

「クトゥルフ神話」において、オカルト的テーマに宇宙から来た存在を混合させたラヴクラフトは、現代SFの源流である。たとえば、代々呪われた不毛の土地は、ポーの「アッシャー家の崩壊」（一八三九年）などにも見

られるが、異星人が出没する「宇宙人の前哨基地」としての森林を描く「闇に囁くもの」（一九三一年）、宇宙から飛来し塔の闇に潜む存在が外に現れ、主人公が息を引き取るときに「私はロデック・アッシャーだ」と叫ぶ「闇をさまようもの」（一九三六年）などは、宇宙から飛来してきた赤いアメーバの脅威を描く『マックイーンの絶対の危機』（一九五八年）のようなSF映画の原型的存在である。そもそも、宇宙人による初期侵略物は、ドイツの台頭に怯えるの大英帝国で書かれたH・G・ウェルズの『宇宙戦争』（一八九八年）であり、人間の血を吸う火星人が侵略してくる。退化の悪夢にとり憑かれたウェルズは『タイムマシン』（一八九五年）『モロー博士の島』（一八九六年）を書いたが、足や消化器官が退化して脳だけが残る火星人と人類の未来の姿でもあった。折りしも雑誌『一九世紀』の論文では、一八八八年二三号のアーノルド・ホワイトの「貧困外国人の^{インヴェージョン}侵入」、一八九二年の三一号のロード・ダンレーヴァンの「困窮移民の^{エイリアン インヴェージョン}侵入」のように、「移民^{エイリアン}侵入^{インヴェージョン}」という言葉が外国人の流入に使われた頃で、大英帝国に侵入してくる吸血鬼の恐怖がブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（一八九七年）によって描かれてもいた。

だが、イギリス生まれの『宇宙戦争』を積極的に「外部との対決を描く際の準拠枠」として活用したのはアメリカだった[小野俊太郎一五九頁]。H・G・ウェルズの『宇宙戦争』は、一九三八年の十月三〇日に「もうひとりのウェルズ」映画俳優オーソン・ウェルズによって、CBSラジオの『マーキュリー劇場』で現実の出来事のように朗読された。ところが、世界恐慌を経験し第二次世界大戦を間近に控えた聴衆は、現実だと錯誤しパニックに

陥った。一九四七年にはワシントン上空で民間パイロットのケネス・アーノルドに世界で初めて目撃され「空飛ぶ円盤」がブームになってゆく。昔から語り継がれるアイルランドの妖精目撃譚には、閃光を放つ不思議な存在と遭遇したというUFO目撃譚に似たものが存在するが、アイルランド系移民が移住した米国では、妖精ではなくUFOとの遭遇の形を取ったことについて、稲生平太郎は「国家の成立事情から固有の民間伝承、神話をもつことができなかつたこの国は、まさに深層においてUFO体験を必要としていた」と、UFOのアメリカ神話的意味を指摘する[四九頁]。「クトゥルフ神話」が育つ土壌は十分肥沃だったのだ⁶⁾。

地球に「赤い草」を蔓延らせるエイリアンが登場したウェルズの『宇宙戦争』は、その後、「共産主義」という「赤」の侵入に怯える冷戦期の一九五三年にジョージ・パル監督によって映画化された。湾岸戦争後の一九九六年には、ローランド・エメリッヒ監督の『インデペンデンス・デイ』として脚色される。抗体のないエイリアンが地球のバクテリアに撃退される原作の結末は、母船円盤のバリアをコンピューター・ウイルスによって攻略するという変更がなされた（一七七五年に起こるフレンチ・インディアン戦争は、フランスと結託した「インディアン」という「エイリアン」にイギリス軍が天然痘の菌のついた毛皮を送ることで生物兵器戦争の「起源」となるが、その継承でもある）。同時多発テロ以後のステイーヴン・スピルバーグによる三回目のリメイク『宇宙戦争』（二〇〇六年）では、ワールドトレードセンタービルが倒壊して粉塵の舞い上がる空は、人々が不安げに眺める空に置き換えられて再現された。空は人々の不安が「^{うつしだ}投影」される「^{スクリーン}銀幕」である。

ラヴクラフトがSFの源流的作品で異形のキャラクターを描いた二〇世紀初頭、精神薄弱とされた「移民」の不法入国の恐怖が囁かれていた。ラヴクラフトは先祖の罪や血筋が子孫へと継承される「血筋」の恐怖を数多く書いたが、そこには、ゴシック的な「呪い」というより、優生学が煽った精神薄弱者の「遺伝」による増殖の問題が潜んでいる。一九二六年にフィラデルフィアで開催された建国百五〇周年記念博覧会でアメリカ優生学協会は、遺伝病患者のために一五秒ごとに百ドルが浪費されていることをフラッシュの点滅で示し、四八秒ごとに一人の精神障害者が生まれることを示す装置を展示した。増加してゆく見えない精神薄弱の脅威を装置によって可視化したのである。その掲示板「将来の子供の祖先である現在の世代の人々がほんの偶然や盲目の情熱のおもむくままに結婚して子供をつくってよいのだろうか」と掲げられ、障害者との混淆の恐怖を煽っていた〔ケヴルズ、一一三頁〕。「ダンウィッチの怪」(一九二九年)では、畸形でアルビノの女と異界の怪物が交わり生まれたウィルバーは、屋敷に閉じ込めた弟に牛の血を飲ませて育てている。黄色く黒い肌で、縮れた髪の毛、分厚い唇、長く尖った耳をしたウィルバーは、アーサー・マッケンの「パンの大神」(一八九〇年)のヘンリー・ヴォーガン、ヤギのようなサチュロスを連想させるだけでなく、犯罪人類学者ロンブローゾのいう生来性犯罪者を思わせ、巨大になった怪物の弟は建物を破って外に出てくる。この「見えない」怪物は悪臭と粘液の足跡を残すだけだが、ある粉をかけられ、触手と複数の眼をもつタコ型エイリアンのような姿を「見せる」。巨大化してゆくウィルバーの弟には、優生学が煽った混淆の脅威が

投影されているのではなからうか。

Ⅳ 「丘の上の町」の地下に潜むもの—魔女・食屍鬼・神話

ラヴクラフトの文学の恐怖は「上空」ばかりから来るのではない。インディアンの土地を侵略して成立したアメリカは、その罪の意識から侵略される恐怖に怯えていた。むしろ、侵略を正当化するために、国家が侵略される物語を必要としていた。こう考えれば、ラヴクラフトが「クトゥルフ神話」を創作し、その後、エイリアンの侵略を描くSFがアメリカで量産される理由が垣間見えてくる。「旧支配者」など人類よりも先に地球にいた「他者」に直面する人間たちを描くラヴクラフトの文学は、インディアンたちの影に怯える白人たちの姿を焼き直した「アメリカのアレゴリー寓話」である〔パールソン 五〇-四頁〕。たとえば、ラヴクラフトが実質ゴーストライターであり、ゼリア・ビショップの著作として発表された「イグの呪い」(一九二九年)は、インディアンの伝説の蛇の神イグの呪いで蛇人間に変えられた白人女性がその子供を産む話だ。「ダンウィッチの怪」に登場する『ネクロノミコン』にはかく記されていた。「人間こそ最古のあるいは最後の地球の支配者なりと思うべからず。また生命と物質からなる尋常な生物のみ、此の世に生くと思ふべからず。旧支配者かつて存在し、将来も存在すればなり」〔五卷二五八頁〕。

ラヴクラフトは歴史の「地下」を掘り起こす。一六九二年にマサチューセッツ州で一九名が処刑されたセイラムの魔女狩り以来、魔女狩りはアメリカの「地下」に染みこんだ汚点として、現代でも映画化され続ける記憶である。魔女の森に撮影にきて行方不明になっ

た三人が残したフィルムが公開されるというドキュメンタリーを装いPOV映画の先駆となったダニエル・マイリック監督の『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』（一九九九年）は、現実の映像だと信じられ大ヒットを飛ばし、最近でも、消息を絶った姉を弟が探すために森に入る『ブレア・ウィッチ』（二〇一六年）が封切られたのは、魔女が未だにアメリカで「リアル」な題材であることを物語っている⁸⁾。架空の町を舞台にするウィリアム・フォークナーの「ヨクナパトーフア・サーガ」と同様に、「セイラム」をモデルに架空の街「アーカム」などを創造したラヴクラフトは、「魔女の家の夢」（一九三二年）のように、ニューイングランドに沈殿する恐怖を活用する（先祖がセイラムの魔女狩りに関わったナサニエル・ホーソーンは「ヤング・グッドマン・ブラウン」（一八三五年）や『七破風の家』（一八五一年）を描いたが、ホーソーンが残した『アメリカン・ノートブック』からラヴクラフトが『ネクロノミコン』の着想を得たとも指摘される [バーレソン一〇九頁]）。

前人未踏の^{ヴァージン・ランド}「処女地」と呼んだ新大陸がインディアンの土地だったという歴史を「意識下」に抑圧し、白人の歴史で「上書き」していったアメリカ人たちは、その罪の意識に苛まれることになる。一六三〇年にマサチューセッツ植民地の初代総督ジョン・ウィンスロップは「我々は世界が注目する理想としての『丘の上の町』にならなければならない」という有名な演説を残したが、東雅夫が指摘したように、地下という「下」の領域は米国の強迫観念となった。「英国」の文学史ではゴシック小説の祖とされるホレス・ウォルポールの『オトランド城』（一七六四年）で姫君が逃げ惑う古城の地下道のように、地

下世界はゴシック文学の重要な要素だが、八木敏雄の『アメリカン・ゴシックの水脈』（一九九二年）によれば、例としては米国初期作家チャールズ・プロクデン・ブラウンの『エドガー・ハントリー』（一七九九年）のように、それはインディアンの潜む洞窟に変更され、人間心理の奥底を描くようになってゆく。「ニューイングランド」を舞台に架空に地名を創造したラヴクラフトは、無意識としての不気味なる地下世界を映し出す。先住民の神話よりも古い過去を創造する「クトゥルフ神話」では、地下で異形なるものが踊り続けるのだ。

たとえば、「棲み潜む恐怖」（一九二二年）では、マーテンス一族の館がそびえる一帯の地下道に毛深い猿のような怪物たちが出没し、死体を食べ人間を襲っている。仲間二人を殺された語り手はマーテンス館と地下道を爆破するが、地下からは退化したマーテンス一族が姿を現す。「鋭い黄色の牙をもち、もつれた毛に覆われる醜悪な白っぽいゴリラのような生物だった。哺乳類の退化が窮極に産みだすものだった。孤立した混淆、繁殖、そして地上はおろか地下での人肉嗜食の恐るべき姿であった」[三巻八八-九頁]。退化と優生学の説く混淆の恐怖が使われている。「魔宴」（一九二三年）のマサチューセッツの港町マーブルヘッドをモデルにした教会の建つ海辺の町「キンギズポート」はあたかも「丘の上の町」だが、教会の地下納骨堂から続く地下世界で人々が魔術の儀式を行なっている。また、「ピックマンのモデル」（一九二六年）では、『地下鉄の事件』など地下鉄に潜む^{グール}食屍鬼たちを好んで描くピックマンは、現実の写真に撮影された怪物をモデルに絵を描いていた。ボストンで世界初の地下鉄が一八九三年に開通し、

ニューヨークでは地下鉄が殺人やレイプなどの犯罪が横行してゆくと、ラヴクラフトの地下世界の恐怖は、『ウィアード・テールズ』系の作家R・B・ジョンソンの「地の底深く」（一九五三年）において再話される。ニューヨークの地下鉄には屍を食べる怪物が出没し、元生物学者ゴードン・クライグは地下を警備して二五年間の地下生活を送っていたが、額が後退し顎が長くなり怪物へと退化してゆく。

ほとんどのラヴクラフトの作品には地下世界が登場するが、ジョンソンの「地の底深く」に継承された恐怖を扱ったのが、ダグラス・チーク監督のB級ホラー映画『チャッドCHUD』（一九八四年）であると東雅夫は指す。「アンダーグラウンド・ピープル」と呼ばれる地下生活者が、不法投棄された放射能廃棄物の影響でマンホールに人間を引きずり込む怪物に変身するのである。地下生活者を調査したジュニア・トスの『モグラびと—ニューヨーク地下生活者たち』（一九九三年）によれば、ニューヨークの地下鉄や下水道は都市のようで、薬物やアルコール中毒で悲惨な生活を送る浮浪者たちが三千人とも五千人とも存在するという。トスの『モグラびと（The Mole People）』というタイトルは、探検隊が地下都市の住民に遭遇するヴァージル・モーゲル監督の『モグラ人間の叛乱』（一九五六年）からだ。トスのルポタージュでは食屍鬼のような隠喩が使われ、ラヴクラフトの虚構の地下が現実化する。「頭上から差し込む最後の光を通り過ぎると、巨大な丸い石が目に入った。保線作業員が危険信号を描くのに使うオレンジ色の蛍光ペンキで『CHUD』と書いている。保線作業員はトンネルの住民のことを『チャッド』と呼ぶ。カニバリスティック・ヒューマン・アンダーグ

ラウンド・ドウェラーズ（地下の人食い人種）の略だ」[トス 九六頁]。ラヴクラフトが誕生させた都市の地下に潜む食屍鬼^{グール}は、喰種の臓器を移植され半喰種になった男を主人公とする石田スイのコミック『東京喰種トウキョーグール』の下層にも潜むことになる。

V 「クトゥルフ神話」の影に一優生学・ 混淆^{ホロコースト}・大虐殺

生物学者スティーヴン・J. グールドが「優生学運動の最初の神話」と呼ぶ一冊の本がある[二〇六頁]。ヘンリー・H・ゴダードの『カリカック家の人々』（一九一二年）だ。ニュージャージー州の訓練学校に、デボラという八歳の少女が収容された。二〇歳を過ぎたデボラは、長年の訓練にもかかわらず知能が上がらないことから、精神に障害があると判断された。家系をたどってゆくと、デボラの祖先のマーティン・カリカックは独立戦争時、精神薄弱の売春婦と関係をもったことが発覚する。後にこの娼婦はその子を出産し、マーティン・カリカック・ジュニアと命名した。このジュニアからは時代を追うと四八〇人の子孫が生まれるが、大部分が精神薄弱者、アルコール中毒者、娼婦、犯罪者で、健康なものは四六人にすぎなかった。『カリカック家の人々』は無計画な生殖のため一般人口の二倍のスピードで出産されている精神薄弱者の脅威を説き、犯罪、売春、貧困、飲酒問題は、遺伝によってアメリカに広がっている精神薄弱者によるものだという恐怖を振り撒いたのである。フランスで開発された「ピネー・シモン・テスト」という知能テストを、移民から精神薄弱者を発見するために一九〇八年にアメリカに導入したのもこのゴダードだった。

デボラの知能の問題を家系を遡って調査す

ると、一人の精神薄弱との性交が浮上し、そこから無数の精神薄弱が誕生したことが判明する構造。これは何とラヴクラフトの文学と似通っていることか。たとえば、「故アーサー・ジャーミンとその家系に関する事実」(一九二一年)は、主人公アーサー・ジャーミンが精神障害者や自殺者が続く自分の家系を遡ると、先祖の男がコンゴで白い類人猿と交わっており、自分がその混血の末裔だったことを発見する物語である。また「インスマスの影」(一九三一年)では、マサチューセッツ州の港街インスマスを語り手は訪問する。その住民の多くは、「頭の形は幅が狭く」「はれぼったくてうるんだ青い眼」をして「耳は異常に発達のおくれた形」で魚類を連想させるインスマス面という奇妙な容貌をしている[一卷 三一頁]。やがて、彼らは旧家マーシュ家の祖先の男と海神との間の混淆で生まれた混血児の子孫だったことが判明し、インスマス面に退化しつつある語り手もまた、その血筋を受けていたことを悟るのである⁹⁾。後に政府がインスマスを調査し、古い家は焼き払われ住民たちは抹殺され、潜水艦が海溝に魚雷を打ち込むという「大虐殺」が行われた。自己の起源を探ると恐怖の血筋にゆきつく「インスマスの影」も優生学と共振するが、血筋を受け入れ語り手が深海で生きるゆくことを決意するというラヴクラフトらしからぬポスト・ヒューマン的結末を迎える。

情緒不安定な母親に醜いと罵倒されたことがコンプレックスになったラヴクラフトは、これらの登場人物同様に、血筋に不安を感じていたのではないか。一九三一年に文通相手ヴァーノン・シェイ宛の手紙でラヴクラフトがポーに対する「無意識的な模倣が最高潮に達した」と告げた「アウトサイダー」(一九二六

年)は、アイデンティティにまつわる物語である(語り手が周囲から嫌悪される自分に直面するこの物語をロバート・M・プライスは「クローゼットの告白」というゲイの萬話だとするし、自分の醜さを鏡で悟る語り手は男ではなく女だとも解釈できる)。古城で書物に囲まれて孤独な時を過ごし自分の姿を知らない語り手は、外に足を踏み出し、ポーの「赤き死の仮面」のような舞踏会に入り込み、『フランケンシュタイン』のように鏡のなかに醜い怪物としての自分の本来の姿を発見する。ダーク・W・モジグは『ニクタロポス』収録の『アウトサイダー』の四つの顔(一九七二年)で「自伝的解釈」「心理学的解釈側面」「形而上学的解釈」「哲学的解釈」からこの物語を読み解くが、三歳時に父親を失い母親の溺愛を受けて育ち、他の子供と遊ぶことなく読書に耽溺した閉鎖的な生活を送り、体調不良で軍隊や大学に行けなかったラヴクラフトの「自伝的側面」が鏡に映したように反映されている。鏡に自分の忌むべき「姿」を見出し、「影との統合」を果たさず逃げだす語り手は、ラヴクラフトなのかもしれない¹⁰⁾。

一九二四年にユダヤ人ソニア・グリーンと結婚したラヴクラフトはニューヨークで新居を構えるが、他民族が混在するニューヨークは彼に衝撃を与えた。彼は平気で黒人をチンパンジーに喩えたり、人種隔離の推進を手紙に記している[レヴィ二七頁]。ニューヨークのレッド・フックという都市を舞台にした「レッド・フックの恐怖」(一九二五年)は、刑事トーマス・マロウンが魔術師ロバート・サイダムに関する事件を調査する物語である。サイダムの手下「準蒙古人種」には、「エリス島の移民検疫所で賢明にも追いかえされる」ような「名前とてない国籍不明のアジア人」

などが跳梁する〔第五卷 一四一頁〕。教会の地下室では、夢魔の女王に復活したサイダムの身体が生贄に捧げられようとする。だが、サイダムの死体は最後に腐敗して溶解する。溶けゆく身体、輪郭のない身体はラヴクラフトの文学の定番だが、サイダムの溶解は「人種の垣塙」の恐怖の表象でもある。

一九二二年にチャイナ・タウンを訪問したラヴクラフトは、手紙に「何と汚い窖か...この豚たちには動物学者では説明のできない群れる本能がある。知性はなく、おぞましい悪臭を放つ肉の塊に過ぎない。有毒ガスを流し息の根を止めこの悲劇に終止符を打ち、土地を浄化すべきだ」と書き、その二年後には「汚水槽に住む、イタリア系、ユダヤ系、モンゴル系の連中はどうしても人間とは思えない。ピテカントロプスとアメーバの混合物に過ぎず、醜悪な土壌の悪臭を放つ泥で造形され、汚い通りやドアや窓から湧き出しようごめき、深海の怪物や増殖する蛆虫を思わせるのだ」とも述べた〔レヴィ二八-九頁〕。こうした驚愕の人種描写については説明の必要もないだろう（彼の人種観については多くの研究があり、ソーファス・レイナートやシルヴィア・モレノー＝ゲーシアのように優生学との関係も考察されている）。この東洋人たちはすぐにでも怪物に変身し、「異形のスペクタクル」を展開するだろう。軍隊に入隊できずコンプレックスを抱えたラヴクラフトの憎悪や不安は、外部の怪物に投影されたのである。

自分の真実を悟り逃げだす「アウトサイダー」の語り手のように、北欧の血筋を誇っていたラヴクラフトもまた自分の血統に対して恐怖を抱いていた。脳梅毒で半身不随となった父、情緒不安定な母をもったラヴクラフトは自己に対する不安に慄いていた。ラヴ

クラフトの有色人種に対する憎悪は、自己への嫌悪から発生したのではないのか。ラヴクラフトの描く有色人種や障害者は彼の内部に隠棲する分身だった。自己の内部に潜んだ脅威を、他者に投影することで、その恐怖の緩和と自己の統合をラヴクラフトは図っていたのである。ユダヤ人の妻をもちながらも、彼はヒトラーの『わが闘争』の熱心な読者であった。マイケル・フィッツジェラルドの『黒魔術の帝国—第二次世界大戦はオカルト戦争だった』（一九九〇年）によれば、ヒトラーは、聖杯探求をはじめ、アトランティス大陸伝説、地球空洞説など数々のオカルトを信奉し、アーリア人の血筋が正統で優秀なことを証明しようとしたが、ラヴクラフトと重なるものがあった。人種の脅威を投影した怪物を描きだしそれを封じ込めるといふ、いわば「^{テキスト}虚構」のなかの「^{ホロコースト}大虐殺」を行ったラヴクラフトは、一九三七年に腸癌のために四六歳でこの世を去るが、やがて、アウシュビッツでナチスのユダヤ人の「^{ホロコースト}大虐殺」が、いかなる恐怖小説も及ぶことのない悪夢を「現実」に展開してゆくのだ。「クトゥルフ神話」の影には優生学が潜んでいた。

註

- 1) この事件に対して、一九三八年の岡山県で起きた「津山事件」は、戦前の最も凄惨な殺人事件である。秀才として名高かった都井睦雄は、結核のため徴兵から除外され村八分の扱いを受け、軍事訓練用のゲートルを足に巻き、ライフルや日本刀を使い二時間ほどで三十人を殺害した。遺書には「兄さんにもよろしく…同じ死んでもこれが戦死、国家のための戦死だったらよいのですけれども、やはり事情はどうでも大罪人と言うことになるでしょう」と書かれた〔筑波 四六頁〕。日中戦争中

アメリカ文化における障害の表象

- の国家総動員法下で、徴兵検査からはじかれた青年が、夜這いの習慣が根付き肉体関係がはびこる山村を殲滅しようとしたこの事件は、国家の体制とつながった「時代の病」だったのかもしれない。西村望の小説『丑三つの村』は、田中登監督によって古尾谷雅人が犬丸継男（都井睦雄）を演じ映画化され、事件を計画した地図には「犬丸継男の戦場」の言葉が記された。これに対して筑波昭のルポタージュ『津山三十人殺し』（一九八一年）では、都井は二・二・六事件には関心を示さず、女性が男性の陰部を切断した阿部定事件に執着したことに注目し、事件を性的観点でとらえている。
- 2) 自分の出自に悩んだヒトラーのユダヤ人説に応じて書かれた手塚治虫の『アドルノに告ぐ』は有名だが、フランク・ピアソン監督のテレビ映画『謀議—アウシュヴィッツの黒幕』（二〇〇一年）にも、SS大将のランインハルト・ハインドリッヒにユダヤ人が混じっているシーンがあるように、ナチスの幹部にはユダヤ人との混血は少なくなかった。
 - 3) ロイ・ウォード・ベーカー監督の『ジキル博士とハイド嬢』では、不老不死の薬をつくらうとして女性ホルモンが鍵だと考えたジキルが女に変身し、ウィリアム・クレイン監督の『ドクター・ブラック／ミスター・ハイド』（一九七六年）ではジキルが白人から黒人へ変わるように、この物語は境界攪乱の隠喩になっている。一九三一年の映画版、そのリメイクでスペイサー・トレイシーがジキルを演じた『ジキル博士とハイド氏』（一九四一年）において、ハイド氏が娼婦（イングリッド・バーグマン）を監禁するが、これは二四の人格をもつ多重人格者に監禁された三人の女性の運命を描いたM・ナイト・シャマラン監督の『スプリット』（二〇一七年）に継承される。この二四人の人格はダニエル・キイスの『二四人のビリー・ミリガン』（一九八一年）を連想させる。
 - 4) 田中聡の『なぜ太鼓腹は嫌われるようになったのか』（一九九三年）によれば、「太っ腹」「腹を括る」という言葉、座禅を理想とする布袋や達磨の腹のでた身体のように、日本は太鼓腹を賞賛した「腹の文化」だった。たとえば、座高という身体測定の方法も、座高の高さが内臓の発達を表し、一九三七年から学校の身体測定に追加され、兵士育成のための指標として機能する。それは足の長い西洋的身体へのコンプレックスの裏返しとしての「腹の文化」の一部だとも言える。やがて、「胸をはる」ことを説き三角筋や胸筋の「胸の文化」に「腹の文化」が取って代われ、現代では腹筋を鍛える機械が好調に販売されるにいたる。国家の欲望によって身体は測定される。かつて厚生労働省は「徴兵検査」で兵役に適うように国民の身体を管理したが、現代では定期健診によって身体は監視される。定期健診を検証する林・葛岡の『大日本「健康」帝国』では「医療費削減という大義のために国民は自己責任のもと、生活習慣病対策・健康維持に努めることが義務であるとされたのだ。まさしくこれ（定期健診）は、現代の国家総動員法である」と皮肉っている〔五五頁〕。
 - 5) 黒田勇の『ラジオ体操の誕生』（一九九九年）によれば、昭和三年に始まったラジオ体操の原型は、一九二五年にアメリカの生命保険会社による宣伝の一環だった。ラジオという新しい媒体の「声」に合わせ、規則正しく時間を定めて集団がひとつになり共通の動作を行うラジオ体操は、国民を統合し身体を管理し、総動員体制のもと戦争へと向かう全体主義と結びつく。また、「紀元二六〇〇年」の一九四〇年に向けて作詞・北原白秋、作曲・山田耕作の「建国体操」を流布させようとした日本体育保険協会の創始者松本学を藤野豊は『強制された健康—日本ファシズム下の生命と身体』（二〇〇〇年）で紹介している。
 - 6) 「闇に囁くもの」では異星人の出没する森に昔は牧神や森の神がいたが、今では「ほかの天体で生まれた生き物はいないまでも、何か奇妙な、おそらく遺伝的に時形を帯びた、世間から見捨てられた存在がいるのかもしれないのだ」と、障害者と異星人が重ねられる〔一卷二二〇頁〕。
 - 7) 卓上ロール・プレイング・ゲーム「TRPG」で「クトゥルフ神話」とそのキャラクターが使われるために、日本のサブカルチャーのラヴクラフトの占める位置は大きい、ほとんど研究されない。
 - 8) 魔女に仕立てられる少女たちの姿を通して赤狩りの集団ヒステリーをアーサー・ミラーは『るつ

ば』（一九五三年）で書いたが、ロバート・エガース監督の『ウィッチ』（二〇一五年）では、自分の娘が魔女だと信じてしまい殺害しようとする農夫の一家の惨劇が描かれた。

- 9) 「インスマスの影」は、『ZOMBIO／死霊のしたたり』（一九八五年）『ネクロノミコン』（一九九四年）などラヴクラフトの映画を多数制作したスチュワート・ゴードン監督が『ダゴン』（二〇〇一年）として映画化した。一九九二年に演出・那須田淳、脚本・小中千昭、佐野史郎・主演で舞台を日本の漁村に移してテレビドラマ化されている。また、「インスマスの影」に人魚伝説を絡めた矢野健太郎のコミック『ダーク・マーメイド』（一九八九年）では、海神を信仰する教団が津波を起こして原発を破壊しようとする陰謀が描かれ、創土社の「クトゥルー・ミュトス・ファイル・シリーズ」の『インスマスの血脈』（二〇一三年）の樋口明雄の「海からの視線」は舞台を原発が誘致された寒村に設定しており、原発が現代日本のゴシックにおいて古城の存在であることを示唆している。
- 10) 「アウトサイダー」を原案とするスチュワート・ゴードン監督の『キャッスル・フリーク』（一九九五年）で主人公ジョン・ライリーは相続する古城を訪れるが、そこには嫡子であるフリークのジョルジュが監禁されていた。同じ娼婦とジョンは性行為を躊躇するが、ジョルジュは性的好奇心から殺害してしまう点からも同じ頭文字Jの二人は分身同士だが、格闘し共に死に絶える。

引用文献

- 稲生平太郎『何か空を飛んでいる』一九九二年、国書刊行会、二〇一三年。
- 上野千鶴子「障害と高齢の狭間から」『現代思想緊急特集 相模原障害者殺傷事件』青土社、二〇一六年十月号。二一・二九頁
- 小野俊太郎『未来を覗くH・G・ウェルズーディストピアの現代はいつ始まったか』勉誠出版、二〇一六年。
- グールド、ステイヴン・J『人間の測りまちがい—差別の科学史』鈴木善次・森脇靖子訳、一九八一年、河出書房新社、一九八九年。
- ケヴルズ、ダニエル・J・『優生学の名のもとに—「人種改良」の悪夢の百年』西俣総平訳、一九八五年、朝日新聞社、一九九三年。
- 筑波昭『津山三十人殺し—日本犯罪史上空前の惨劇』一九八一年、新潮文庫、二〇〇一年。
- トス、ジェニファー『モグラビと—ニューヨーク地下生活者たち』渡辺葉訳、一九九三年、集英社、一九九七年。
- 富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』青土社、一九九五年。
- 林信吾・葛岡智恭『大日本「健康」帝国—あなたの身体は誰のものか』平凡社、二〇〇九年。
- 原口剛「貧富の戦争がはじまる—オリンピックとジェントリフィケーションをめぐる」小笠原博毅・山本敦久編『反東京オリンピック宣言』航思社、二〇一六年。九四—一〇九頁。
- 東雅夫「誰のために『食屍鬼』は食らうのか」『別冊宝島四五七 もっと知りたいホラーの愉しみ』宝島社、一九九九年。二〇三—二一一頁。
- 増田展大『科学者の網膜—身体をめぐる映像技術論—一八八〇年—一九一〇年』青弓社、二〇一七年。
- ラヴクラフト、H・P『ラヴクラフト全集—巻〜七巻』東京創元社。
- Burleson, Donald R. *Lovecraft: An American Allegory: Selected Essays on H.P. Lovecraft*. New York: Hippocampus P, 2015.
- Lévy, Maurice. *Lovecraft: A Study in the Fantastic*. Tran.S.T.Joshi.Detroit Wayne UP, 1988.
- Moreno-Garcia, Silvia. *Magna Mater: Women and Eugenic Thought in Work of H.P. Lovecraft*. Dissertation. The U of columbia. 2016.
- Price, Robert M. "Homosexual Panic in "The Outsider." *Cript* 8 (1982): 11-13.
- Reinert, Sophus A. "The "Economy of Fear: H.P. Lovecraft on Eugenics, Economics and the Great Depression." *Horror Studies* 6.2 (2015): 255-282.
- Smith Angela A. *Hideous Progeny: Disability, Eugenics and Classic Horror Cinema*. New York, Columbia UP, 2011.